

日本教育岩手

● 〒020-0024 盛岡市菜園1-11-15

日本教育会岩手県支部 TEL 019-623-8100

● 代表 川村 祥平



子どもの好奇心と探究心

岩手県中学校長会 会長 照井 英輝

(盛岡市立厨川中学校校長)

理科教員の私は、年末が近づいてくると気持ちがワクワクします。

その理由は、日本人の科学者がノーベル賞に選ばれたかという期待感にあります。今年度、ノーベル生理学・医学賞に坂口志文先生、化学賞に北川進先生のお二人が受賞されました。私はすぐに新聞記事や専門誌からその研究内容を知りたくありませんが、イノベーションを起こすような研究を理解することは難しいものです。どのような研究においても、その事物・事象に対する好奇心が、私は大切であると思っています。「なぜそうなるの?これは何?」という疑問。そして、その後の強い探究心と不断の努力が世界を驚かせるような素晴らしい成果に繋がっていくと思っています。

私には忘れられない経験があります。初めて小学校に勤務した時の出来事です。その日は、1日中草刈り機をもって校舎周りの草刈りをしていました。夕方、下校時間を過ぎて、職員駐車場にしゃがみ込み下を向いて動かない女子児童がいました。私は、心配になり声を掛けてみました。

「どうしたの?具合でも悪い

の?」すると、その児童は顔をあげ、元気な声で、「副校長先生。なんでこんなにきれいな色の石が落ちてくるの?何という石?ねえ何ていうの?」。初見では、その石は火成岩の一種であると判断しましたが、私はあえて「何という石かなあ」。理科室にヒントになるものがあるよ。明日のお昼休みに理科室で待っているから、石を持っておいで」と声を掛けると、その児童は周囲に落ちていた別の石を集めてポケットに沢山詰め込み、嬉しそうに下校をしていきました。

私は、5年生の若い教員の補助として理科の授業に入り、実験の準備と後片付けや苦手としている指導場面です。その教員に代わり指導をしていました。理科準備室に、埃を被ってはいるが立派な岩石標本や鉱物標本、化石等が眠っていることを把握していました。

私は翌日、理科室の机の上にこれらの標本をいっぱい広げて児童を待っていると、児童は友達を連れて元気よく入ってきました。拾った石は、可愛い絵柄の巾着袋に一杯になっていました。「わあ、すごい。石がいっぱいある。副

校長先生、この石はどれなの?教えて」「同じような色の石を見つけてごらん。そして見つけたら、表面をじっくり比べてごらん」

児童たちは、目を見開いて、自分の石と標本の石を何度も何度も見比べていました。そして、これだと思ふ石が見つかった。「副校長先生。この石は、○○という石に似ているよ。どうやってこんなきれいな石が出来たの?」児童にとっては、宝物である一つひとつの石のことが知りたくてしょうがないのです。探究心の塊です。

中学校の理科教員を長く続けていると、子どもがもつ事物・事象への純粋な好奇心と探究心を忘れがちになり、テストや調査問題で得点を挙げることを優先してきたのではないかと自省しています。中学生の意識においても問題を分かります。説明し、受験対策に懸命な先生を評価する傾向があることを、私は日々の生徒との面談で把握しています。

2019年にノーベル化学賞を受賞された吉野彰先生は、次のように述べられています。「現場の先生方にお願したいのは、どうか子どもの好奇心をくすぐってあげてください。ほんのちよつとの言葉でいいのでね。一人ひとりに何か関心をもたせてあげたら、その後どういう道を歩んでいくのかは子どもが決めます」この言葉をこれからも心に持ち続けたいと、私は思います。



大阪大会 開会式

令和7年度第50回全国教育大会大阪大会報告

公益社団法人日本教育会主催の第50回全国教育大会大阪大会は11月1日(土)、J R大阪駅から徒歩5分の21階建てビルの都市型キャンパス大阪工業大学梅田キャンパス常翔ホールで開催されました。今大会では北上市立黒沢尻幼稚園の山本ゆかり園長が提言を行い、岩手県支部からは6名の会員が出席、2名がオンラインで参加しました。

大会主題「自らの頭で考え判断し表現する力を育てる教育」

北上市立黒沢尻幼稚園 山本ゆかり園長が提言した

感じ、考え、夢中になって遊ぶ幼児を育てる

◆開会行事

日本教育会鷲山恭彦会長から、「全国教育大会の最大の特徴は幼稚園・こども園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校と、校種を超えて大会主題に基づいた提言がなされ、令和3年度大会からは家庭・地域社会からの提言もなされていることである」との挨拶がありました。続いて、文部科学大臣代理の文部科学省大臣官房会計課長の常盤木祐一氏と大阪府教育委員会教育長の水野達朗氏から祝辞が述べられました。

◆大会趣旨説明および6分野(幼稚園・こども園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、家庭・地域社会)からの提言

初めに、「現代は変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の時代であり、先行き不透明で将来の予測が困難な未来となっている。こうした時代にあつては、自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力を身に付けることが重要である。自ら問いを立て、自らの頭で考え判断し表現する力、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し、納得解



提言を聴く会場の様子

を生み出す力などが求められるということから大会主題を『自らの頭で考え判断し表現する力を育てる教育』にした」との大会趣旨説明がありました。

引き続き、6分野からの提言があり、自ら学ぶ・自ら考える・対話的生成・地域社会との連携・わかる実感・できた実感・若者：など、大会主題に沿ったキーワードが強く心に残っています。

また、提言を行った地域は、岩手、鹿児島、大阪、和歌山、新潟・熊本と全国にわたり、各地の意欲的な取り組みを学ぶことができました。

研究から得るもの

北上市立黒沢尻幼稚園

園長 山本 ゆかり



第50回全国教育大会大阪大会において、

全国の先生方に、本園の研究内容を発信し共有する機会をいただいたことに感謝申し上げます。

発表した研究は、令和5年度から継続しています。「友達と夢中になって遊ぶ幼児を育みたい」と取り組み始め、「幼児が夢中になる時、たくさん感じ考えながら遊んでいること」「友達との関わりによって自身の考えを広げ、より夢中になること」「関わるための言葉のやりとりを育むことが大切なこと」「言葉を育む一つの手立てとして、体を動かす遊びに効果があること」を実践から学び、日々の保育に生かしているところです。

大会前々日、本園では公開保育を行い、参会した方々に、言葉でやりとりをしながら夢中になって遊ぶ子どもたちの様子をたくさん見ていただきました。そのことも含め、継続した取組による援助や環境構成の改善を発表できたことは、大変貴重な経験でした。ありがとうございました。



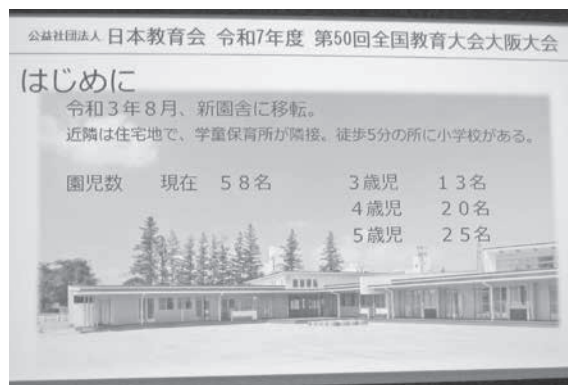
黒沢尻幼稚園山本園長の提言

◆北上市立黒沢尻幼稚園の提言
山本ゆかり園長から、北上市立黒沢尻幼稚園が取り組んできた「感じ、考え、夢中になって遊ぶ幼児を育む」友達との関わりを大切にしたい保育者の援助を探る」

した。その中で、熊本市の高校生2人による提言は印象的でした。家庭・地域社会の分野で高校生が提言を行うのは初めてとのことですが、市内の市立・県立・私立の高校生60数名で「熊本魅力推進生徒会（KMSS）」を組織し、意見交換会等を実施して「若者がまちづくりの主役として活躍できる」等の提言を市長に行っているということでした。教員のアドバースを受けながら活動し、卒業のためメンバー・リーダーの交代があるものの、引継ぎ、SNS発信等を行いながら活動を継続しているそうです。

という実践を踏まえた提言がありました。パワーポイントの操作は岩手県国公立幼稚園こども園協議会の後藤敏信会長が担当しました。友達との関わりを通してたくさん感じ、たくさん考える姿、夢中になって遊ぶ姿を目指して園内研究を続け、更に、言葉のやりとりを大切にしたい援助を探り、幼児が友達と夢中になって遊ぶようになる過程をステップ表にまとめ、体を動かす遊びを通して友達と夢中になって遊ぶということについても取り組み、子どもたちが「やっぱり一緒に楽しい」と思えるように、協働する力の基礎を育んでいきたいという提言に大きな拍手が贈られました。

（副支部長 内澤 英明）



スライドを利用したの提言

記念講演「AI時代の教師が知っておくべきこと」

講師 兵庫県立大学環境人間学部教授 竹内 和雄氏



講演する竹内和雄教授

本大会の記念講演として、「AI時代の教師が知っておくべきこと」と題した講演を拝聴しました。講師は、兵庫県立大学環境人間学部教授竹内和雄氏です。竹内氏は公立中学校に約20年間勤務され、生徒指導主事等を担当、また、小学校との兼務経験もあり、2007年には寝屋川市教育委員会教育指導課指導主事、2012年から現職に就かれています。生徒指導を専門とし、ネット問題やいじめ、不登校など、課題を抱える子どもへの対応について研究を続けておられます。

講演では、「AI時代における教育の在り方」や「教育現場におけるインターネット・テクノロジーの活用」、「教師が留意すべき点と具体的な推進方法」などについて、具体的なデータを基に分かりやすく説明されました。多くのスライドを用いたテンポの良い進行に加え、クイズ形式で参加者に考えさせたり、隣同士で意見交換を行ったなど、主体的に学べる工夫が随所に見られました。そのため、時間があつという間に感じられる講演でした。

現代社会においては、子どものスマートフォン依存やネットいじめ、SNSをめぐるトラブルが大きな課題となっています。竹内氏は常に最新の情報を提示し、大人が把握しきれていない子どもたちのSNS利用の実態を具体的に示されていました。また、大人が一方的にルールを押し付けるのではなく、子ども自身がリスクを理解し、どのように活用すべきかを考えることの重要性を強調されていました。さらに、ネットに関する悩みは先生や保護者に相談しても解決しないと感じている子どもが多い現状を踏まえ、専門家と連携するなど、大人が取るべき具体的な対応策についても提言されました。

講演を通して、ネットやAIの利活用を進めるにあたり、教育関係者が何に注意し、どのように進めていくべきかを改めて考えさせられました。今後の教育実践に生かしていきたいと感じる、非常に示唆に富んだ講演でした。

（久慈市立長内中学校 校長 外館 邦博）

地区会だより



紫波地区会

8月30日(土)「紫波グリーンホテル」において、紫波地区退職校長会と合同で、研修会・親睦会を開催しました。当日は、ご来賓をはじめ終身会員や小・中・高の会員等合わせて50名の出席がありました。

研修会前には、今年度選出された代議員・役員による合同会議を実施し、事業計画や予算等について協議を行いました。

研修会では、「スポーツの可能性、子どもたちにおけるスポーツ観戦の意義」と題して、2季ぶりのB2復帰を果たした岩手ビッグブルズ代表取締役社長の水野哲志氏をお招きしてご講演をいただきました。

水野氏からは、プロスポーツ経営の厳しさや「岩手ビッグブルズは復興のシンボルとして共に歩み続けます」というクラブ理念のもと、子どもたちに元氣と勇氣を与え、憧れられる存在であり続けるために、地元との関わり合いを大切にしてきたクラブの歩み等についてお話いただきました。中でも、

ヒーロー(選手)や家族との一体感、応援する経験、イベントの成功体験等、プロスポーツとの関わりが、子どもたちの自尊心の向上につながるという内容は非常に興味深いものでした。

その後の親睦会では、教育の現状やご講演の内容等を話題にしながら、親睦を深めました。

(事務局長 内川 千亜希)



ビッグブルズ水野哲志氏の講演

一般財団法人 岩手県教育振興基金の公益事業

「(公財)岩手育英奨学会へ146万円を助成」

～県内公立小中学校の新任校長・副校長のご協力により～

令和7年10月8日、公益財団法人 岩手育英奨学会への「育英奨学金贈呈式」が岩手県庁教育委員室において行われました。

(一財) 岩手県教育振興基金 川村祥平理事長は「今年度も助成金を贈呈することが出来ます。経済的な理由で修学が困難な生徒たちのためにご活用ください」と挨拶し、寄付をした新任管理職の方々の名簿を添えて、(公財) 岩手育英奨学会 遠藤洋一会長に寄付金の目録を贈呈しました。

遠藤洋一会長は「さまざまな家庭事情を抱え困っている子どもたちのバックアップ体制の一つとして大切にに使わせていただきます。多額の温かいお志をいただき深く感謝申し上げます」と御礼の言葉を述べました。

今年度は県内公立小中学校と県立学校の新たに校長、副校長になった145名から1人1万円のご寄付を頂き、教育振興基金からの寄付を加え、合計146万円を贈呈いたしました。岩手育英奨学会のHPによると令和7年10月31日現在の寄付総額315万円のうち46%が基金からの寄付となっております。寄付にご協力をいた

だいた新任管理職の皆様は厚く御礼を申し上げます。なお、この事業は2013年から毎年継続し、今年度で13年目となり、これまでの寄付総額は2,648万円となりました。

令和7年度は(公財) 岩手育英奨学会の奨学生として209名が高等学校及び専修学校や大学等に在籍し学業に励んでいます。また、最近の急激な物価高騰や実質賃金マイナスなどで、経済的に苦しい家庭は確実に増えています。未来ある若者たちが希望を持って勉学に励むことができる環境を整えることは私たちの大切な役割でもあります。今後この事業を継続してまいりますので、令和8年度新たに管理職になられる方々のご協力も是非よろしくお願いいたします。



川村支部長(右側)から目録贈呈

岩手教育振興基金

寄附者御芳名

(敬称略)

○終身会員

▼盛岡地区(22名)

高橋一佳・高橋克壽・飯岡竜太郎
中村幸子・伊藤茂美・杉本光生
前川岳詩・竹山正太郎・高畑嗣人
佐藤勤・泉澤毅・久慈孝・三浦隆
小野寺満・小石孝紀・柏崎裕子

上平互哉・川越浩子・晴山雅光
坂本美知治・堀切茂行
長島香乃子

▼岩手地区(7名)

八重樫晃生・小野寺哲男
工藤靖夫・遠藤岳・黒澤みほ子
藤野高嗣・吉田敏子

▼紫波地区(1名) 森和佳子

▼花巻地区(7名)

森山学・林博文・沼田弘二
長山ゆかり・浅沼清智
高原智康・小田島圭

▼遠野地区(1名) 菊池国子

▼北上・和賀地区(5名)

及川禎彦・門屋健司・佐々木修
波田野誠・高橋一彦

▼胆沢地区(4名)

佐藤利康・菅原るみ子
城生野成則・最上啓

▼江刺地区(2名)

青沼徹・後藤康

▼一関西地区(3名)

佐々木由香里・瀧野澤公美
金里徹

▼一関東地区(3名)

後藤純一・那須聡・菅原秀文

▼気仙地区(1名) 蒲生正光

▼二戸地区(2名)

菊池真理子・高橋利明

(58名)

今回は、令和7年3月にご退職

(役職定年を含む)され、終身会員
としてご加入いただいた小・中・高・
特支・教育行政の先生方58名を、
加入希望地区会ごとにご紹介いた
しました。

お一人1万円のご寄付をいただ
き、深く感謝を申し上げます。

温かいお志をお寄せいただき、多
額のご支援・ご協力を賜りましたこ
とに衷心より感謝を申し上げます。

東北ブロック連絡協議会 報告

日本教育会の「令和7年度東北
ブロック連絡協議会・教育懇談会」
は、令和7年12月12日(金)、公
益社団法人日本教育会専務理事、
東北ブロック代表理事、岩手県支
部役員等21名が出席して、アイ
ーナで開催されました。

日本教育会の活動状況と課題等
について、常盤隆専務理事から話
題提供があり、福島県小学校長会
笠原聡美事務局長(福島市立三河
台小学校長)から原子力災害によ
る避難に伴う学校の現状と課題、
回復・充実への具体的な取組等
についての報告がありました。「学校
は復興の最大の拠点」の信念のも
と、すべての子どもたちが「福島に
誇りをもつ」ことができるよう地域
に根ざした教育を実現していくと
いう言葉が強く印象に残りました。

続いて、岩手県支部から総会・
記念講演会等活動状況の報告、調
査研究・研修・子どもの健全育成
事業等への助成について報告があ
りました。

その後の教育懇談会では、多岐
にわたる災害対応・防災教育と若
手教員育成を中心に活発な意見交
換が行われました。本部及び他県
の取組を直接伺い、本県の活動を
紹介して情報共有できる貴重な機
会となりました。

スポット
その189

岩手県小学校長会

会長 川村 憲弘 氏

(盛岡市立津志田小学校 校長)



川村憲弘校長先生
は令和5年4月、
第15代校長とし
て着任されまし
た。現在は、岩
手県小学校長会
会長、盛岡市
特別支援教育
研究会会長
等を兼任さ
れています。
先生はこれ
まで、小学校だ
けでなく、総合教育
センター、盛岡市教
育委員会事務局、八
幡平市教育委員会事
務局、岩手県教育委
員会事務局と幅広く

経歴を重ねています。その間、
特別支援教育の専門性を生か
し、県内の特別支援教育の中心
となつて活躍されました。「他
事優先」、「不言実行」を信条に
実直に業務に取り組み、着実に
成果を積み上げてきたと
伺っています。そして、
これまでのご尽力か
ら、令和7年度教育者
表彰を受賞されました。
子どもたちの安全な学
校生活のために、毎朝、登校
指導を行い、登校する子ども一人
一人と挨拶を交わしています。温
かいお人柄に惹かれ校長室を訪
れる子どもも多く、先生の周りにはい
つも子どもの声があふれています。
(副校長 根本地淳)

飛躍の秘密を探る その5 岩手県立西和賀高等学校

西和賀高校と西和賀町の 協働による魅力化の取組

岩手県立西和賀高等学校 校長 高橋 国博

はじめに

本校は令和7年度入学者選抜から1学年2学級定員となった。

これは、町内唯一の本校を存続させること、地方創生の推進を図ろうとしている西和賀町と本校が協働して進めてきた魅力化の取組が実を結んだ成果であり、新たなスタートラインに立ったことを意味する。

西和賀町について

本校が所在する西和賀町は、平成17年に旧湯田町と旧沢内村の合併により生まれた町である。

特別豪雪地帯に指定されるほど厳しい環境の中でも、旧沢内村が昭和37年に日本で初めて乳児死亡率ゼロを達成した。「生命尊重」の理念は今でも町民の誇りである。

人口減少にあえぐ自治体の中で



錦秋湖（毎年5月に高総体ローイング競技の会場となる）

も西和賀町は、他の自治体よりも人口減少のスピードは速く、その人口は両町村の合計で昭和35年の19,364人のピークから令和7年9月末現在4,518人と、65年で約1万5千人の減少。令和7年10月時点の高齢化率56.1%は岩手県内33市町村でワースト。人口戦略会議が予測する消滅可能性自治体。

西和賀高校の概要と沿革

前述のとおり本校は西和賀町にある唯一の県立高校である。旧湯田村と旧沢内村の強い要望に応える形で産声を上げ、今年度、独立から54年目を迎えた。

校訓「主独立の道行かん」は厳しい自然環境下でも、中央からの支援に頼らず生きていこうとした西和賀地方の人々の魂の叫びを反映していると推察する。



校舎全景

本校の沿革は次のとおり。

昭和23年 湯田村川尻に県立黒沢尻第一高校川尻分校、沢内村太田に川尻分校沢内分室設置

昭和24年

沢内分室が沢内分校に昇格

昭和44年 川尻分校と沢内分校を統合し、湯田町湯田に黒沢尻南高校西和賀分校設立（普通科1学年2学級）

昭和45年 学級増（1学年3学級）
昭和47年 岩手県立西和賀高等学校

校として独立（生徒数374名）

昭和56年 学級減（1学年2学級）

平成4年 校訓制定「主独立の道行かん」

平成7年 普通科「福祉・情報コース」新設

平成30年 学級減（1学年1学級）

令和2年 「福祉・情報コース」廃止

令和4年 いわて留学籍集開始

令和7年 学級増（1学年2学級）

西和賀高校が実践している少人数指導

本校には多様な生徒が在籍している。卒業後、大学進学を目指す者、就職を目指す者。部活動に熱心な者。ボランティア活動で地域に貢献したい者等々。

そのような生徒一人ひとりが充実した高校生活を送り、「西和賀高校に入学してよかった」と思い、西和賀高校が自分の居場所だと実感できるように、次のような取組をしている。

(1) 1学級募集を2学級展開

少人数をさらに少人数化して、きめ細かい指導をする。1学級20人未満となり、分かる授業、個に応じた指導を行うことができる。

(2) 習熟度別授業の推進

今年度は数学、英語、物理基礎で2学級を3グレードに分けて授業を行っている。学び直しも行いながら、わかる喜びを初めて実感する生徒がいる。

1 西和賀高等学校教育振興会
西和賀町長をはじめとする行政関係者、商工会及び社会福祉協議会等、町内小・中学校及び本校のPTA、本校同窓会等の代表等が委員を務める。次のように本校の教育活動全般を支援している。

(1) 総合的な探究の時間の活動をサポート

「西和賀町が消滅せずに持続するためには西和賀高校の存続が不可欠だ」と考えた町当局が主導して、次のような組織を立ち上げた。

魅力化に向けた組織



授業の様子

2 西和賀高等学校魅力化推進委員会
委員は前出1の教育振興会とは同じ。具体的な事業は

(1) 入学生募集のためのポスター、学校案内の作成
(2) 入学生募集のための関係中学校訪問（年2〜3回）
(3) 広報誌「雪華」発行



海外研修（オーストラリア）の様子

(2) 各種検定や模擬試験等受験費用補助
(3) 入学生確保のための活動（体験入学、いわて留学のための説明会参加）
(4) 部活動の強化・大会参加費用等の補助
(5) 昼食の副菜補助
(6) 海外研修（オーストラリア）補助

これはそれまで本校が実践してきた少人数指導、すなわち「きめ細やかな少人数指導によって、誰もが自分らしく成長できる学び舎づくり」を理念として、前出の組織がそれぞれ行っている活動の精度を上げられるよう、西和賀町教育委員会と協働するためのビジョンである。

次の(1)〜(3)を基本方針として、ア・エの実現を目指している。

平成30年に1学年1学級募集になったあたりから、西和賀町は危機感を強め、教育委員会主導で西和賀高校魅力化推進ビジョンを策定した。

西和賀高校魅力化推進ビジョン策定

3 西和賀町高校教育推進委員会
進学希望者に学習支援をすることを目的に、西和賀町長、西和賀町教育長、元県立高校教員等を委員として、令和4年5月に設立。公営塾として主に3年生の進学希望者に数学、物理、小論文の学習支援を行っている。



学校案内

今年度の在籍生徒数136の内、町内中学校出身者は43。町内中学校出身者の割合は32%足らずだが、西和賀町は本校存続のために変わらず支援を継続してくれている。本校はそれに応える形で地域と協働し、少人数教育をますます充実させる決意である。そして、夢と希望を胸に入学した生徒たちが本校で学ぶことによって、その後の人生を切り拓くと共に地域に貢献できると信じている。

まとめ

(1) 少人数指導の継続に向けた町からの支援の拡充
(2) 中学生及び保護者に対する情報発信の拡充
(3) 充実した高校生活に向けた地域でのサポートの拡充
一人ひとりの願いの実現
イ満足度の高い少人数指導の実施
ウ地域人材育成拠点の維持
エ地域に支えられた学校運営による存続

「地域とつむぎ」

花巻市立若葉小学校 校長 熊谷 直樹



花巻市立若葉小学校は、今年度創立60周年を迎えました。60年の歴史を振り返るとともに、新たな伝統を築こうと、児童会を中心に行事や様々な活動に取り組んできました。10月には記念式典を行い、花巻市出身で2025年本屋大賞を受賞した阿部暁子様を講師にお招きし、対談形式の講演会を行いました。

昭和41年花巻市上根子にあった上中小学校が若葉小学校に名称変更し、昭和43年、現在地に移転、花巻小学校の学区であった東北本線以西を学区として全校734名でスタートしました。60年前は、学校周辺には花巻中学校しかなく、花巻駅から学校を見ることができたそうです。現在は、住宅が密集し状況は変化しましたが、地域の方の学校に対する思いは変わらず、支えていただきながら60年

間歩んでまいりました。

地域活動がとても盛んで、地域の教育力が学校教育の支えとなっています。

まずは、花巻祭りへの参加です。二つの町内会が山車を出します。

また、子ども神輿を出す町内会もあり、山車や神輿を担いで地域を回り、地域住民が一体となって祭りを盛り上げます。本校職員の親睦会（若葉会）でも神輿運行を昨年度から復活させ、地域の一員として花巻祭りに参加しております。子どもたちや地域の方から声をかけていただくことが何より嬉しくありがたいことだと思います。

次に、野球・ソフトボールを通しての健全育成です。子ども会単位で指導体制を組織し、年間を通して早朝や週末にリーグ戦や大会を開催してきました。現在は、参加児童の減少により野球のみとなりますが、合同チームで大会を行っています。地域で子どもたちを育て

ていく活動が継続していることが素晴らしいです。

新たな活動も行われています。地区子ども会活動の活性化を図ろうと、PTA役員が中心となりWAKABA GAMESを3年前から開催しています。ストラックアウトなど4種目で地区ごとで得点を競います。子どもたちだけでなく、親の部もあり、今年度は、200人が参加しました。

地域とともに発展し、地域に支えられてきた若葉小学校。これからも、地域の期待に応え、学校教育の充実を図りたいと思います。



運動会で4年生が作成した60周年の横断幕

山寺の鐘

令和7年11月26日、東北高等学校文化連盟理事会のため、福島県の浪江町と双葉町を訪問し

た。東日本大震災から15年が経過したが、復興にはまだまだ時間がかかると実感した▼福島県では、震災の年の8月に、全国高等学校総合文化祭が予定されていた。震災で開催が危ぶまれたが、全福島県民の尽力、全国からの支援により開催に漕ぎ着けた。高総文祭福島大会は大きな感動を呼び、復興の機運を高めた▼今回の訪問で、元福島県立富岡高等学校校長の青木淑子さんの講演を聞いた。被災地域の人々の気持ちを繋ぎたいという思いで、「富岡高校校歌を歌う会」や演劇活動などを実践している方だ。青木さんから、復興を支え、地域を発展させる礎は、文化の力だ、という言葉をいただいた▼音楽、郷土芸能、演劇などの文化活動とおし、人を育て、人を結び付けることこそが、地域の活力、被災地復興の力となる。

（岩手県立盛岡第四高等学校長 全国高等学校文化連盟会長 川崎 広幸）